

せめぎ合うヒロシマの記憶
Contesting Memories of Hiroshima
1955年シカゴにおける広島原爆投下日の
記念集会とその新聞報道をめぐる一考察
The Commemoration of the 10th Anniversary of
the Hiroshima Bombing and Its News Coverage

浅井理恵子
ASAI Rieko

はじめに

アメリカ社会における原爆投下の公的記憶は、戦後60年近くを経た今もなお投下決定を支持する声が支配的である。第二次世界大戦を「自由のための聖戦」、「良い戦争」と称える勝者の物語のなかで、「原爆投下が戦争終結を早め、多くのアメリカ人の命を救った」という原爆投下の「公式の物語」が、軍関係者・政府・マスメディアを中心に繰り返し主張されてきた。このことは、終戦50周年を記念して企画された国立スミソニアン航空宇宙博物館のいわゆる「原爆展」をめぐる論争に端的に現れたといえる。当初、原爆投下の歴史的背景や原爆投下の被害状況、その後の核時代の進展まで展示に含んでいた案は、退役軍人団体を始め、議員やマスメディアなどの激しい反対にあい、最終的にエノラ・ゲイの機体前半部分と乗組員のビデオ証言のみの展示へと大幅に縮小された。このように、戦後50年という節目は、原爆投下の国民的記憶に関し、投下を肯定する勢力が依然として強力であることをあらためて示す結果となった²。

しかしながら、戦後の歩みのなかで、原爆投下の「公式の物語」に異を唱え「原爆肯定」を切り崩す営みもまた続けられてきた。その代表的なグループとして、アメリカの平和運動家を挙げるができる。平和団体や

活動家たちは、原爆投下直後より人道的・戦略的な面から投下決定を批判してきた。また、1960年代初頭に盛り上がった核実験反対運動や1980年代前半に高揚した核凍結運動では、8月6日や9日に全米各地でさまざまな記念集会やデモンストレーションが行われた。このような原爆投下と平和運動の関係については、これまでも研究されている。たとえば、戦後急速に高まった科学者の平和運動を研究したスミスは、運動生成の直接の動機として、原爆製造にかかわった科学者たちの社会的責任感と核戦争防止への使命感を挙げている。また、ウーリーやチャットフィールドらは、科学者運動と同様に戦後高揚した世界政府運動において、原爆投下がもたらした「核による人類の滅亡」という「恐怖」が運動の飛躍的な拡大を促したと述べている。さらに、ウィットナーは、第二次大戦以前より活動していた反戦・非暴力を唱える平和団体やそのリーダーたちが、原爆投下を倫理面および戦略面の双方から批判し、それらを反核兵器運動の基盤としたことを明らかにしている。他方、平和運動を原爆投下の公的記憶という視座から考察したリフトンやボイヤーは、運動は原爆投下の是非は問わず、もっぱらヒロシマを反核の象徴として呈示してきた、と述べている³。

これらの先行研究は、原爆投下が個々の運動の生成・展開に与えた影響や平和運動内で形成された原爆の集合的記憶について明らかにしているが、原爆の公的記憶をめぐる平和運動と一般社会との関連についてはあまり注目してこなかった。このことを踏まえ、本稿では平和運動内部で形づくられた原爆投下の記憶が、メディアを介し外部社会に受容される過程に注目する。その際、原爆投下をめぐるメッセージの送り手と受け手の権力関係のあり方に注目しながら、平和運動内部で形成された原爆投下の記憶が、最終的に「公式の物語」を中心とする原爆の公的記憶に回収されていく一端を示したい⁴。

具体的には、新聞を平和運動とアメリカ社会の結節点として位置づけながら、原爆投下10年目にあたる1955年8月6日にシカゴで行われた記念集会を取り上げる。シカゴは、20世紀初頭に平和協会が設立されるなど、北東部以外の地域では例外的に、早くから平和運動が盛んな地域だった。また、原爆投下を記念する集会は、1940年代後半から平和団体や教会関係者

などによりアメリカ各地で行われていたものの、メディアの関心を引くことはほとんどなかった。その意味で、シカゴで行われた1955年の記念集会は、メディアの注目を集めた例としては最も早い時期に属する。以上のことから、この事例は原爆投下の公的記憶形成をめぐる平和運動とメディアの関係性において、ひとつの原型を呈示していると見ることができるであろう。本稿ではまず、原爆投下から10年間のシカゴにおける平和運動の推移を概観した上で、1955年8月6日に行われた記念集会の内容と集会を報道した新聞記事を詳細に検討する。そして、メッセージの送り手と受け手のさまざまな権力関係に注目しながら、原爆の公的記憶が生産される一断面を明らかにする⁵。

1. 戦後10年間の平和運動の展開——シカゴを中心に

シカゴでは、20世紀初頭よりさまざまな形の平和運動が展開していたが、第二次世界大戦中にはすでに核兵器に反対する動きが芽生えていた。それはマンハッタン計画に参加していた原子科学者によるもので、この動きはいわゆる「フランク報告」に発展する。この作成にあたったユージン・ラビノウィッチやレオ・シラードなどシカゴ大学冶金研究所の科学者たちは、1945年11月に原子科学者の全国組織、「原子科学者連盟」（のちに米国科学者連盟と改名）を結成し、核エネルギーの国際管理実現を目指し議会でのロビー運動や世論の教育活動を行った。また、ラビノウィッチらが創刊した『原子科学者会報』は、核問題に関する世論の啓発手段として最も影響力のある出版物となった⁶。

他方、世界政府運動においても、東海岸を中心とする運動展開のなかで、シカゴのグループは特異な役割を果たした。武力行使を含む国家の主権を超国家政体に委譲することを目的としたこの運動は、政策立案団体、学者、知識人などが先導し民衆レベルにまで浸透した。1947年には主要な団体が合併し「世界連邦連盟」が結成された。シカゴの世界政府支持者はこれとは一線を画し、独自の運動を行った。その中心は、シカゴ大学学長ロバート・ハッチンスらが組織した「世界憲法作成委員会」である。委員会は、世

界政府の憲法私案を作成し公表するとともに、機関誌『コモン・コース』において超国家政体に関する理論的な議論を行ったり国内外の世界政府運動の情勢を伝えた⁷。

しかしながら、1940年代後半から1950年代初めにかけて起こった冷戦の激化と国内状況の悪化により、科学者運動、世界政府運動ともに衰退を余儀なくされた。1949年のソ連による原爆実験の成功と中華人民共和国樹立に続き、翌年初めにはアメリカが水爆製造の開始を宣言し、6月に朝鮮戦争が始まった。このような二極分化した国際情勢の中で世界政府運動は非現実的に映り、また反共主義のあおりを受け、1950年代初めに瓦解した。いっぽう、核エネルギーの国際管理構想が挫折し、打撃を受けていた科学者の運動は朝鮮戦争によって二分され、多くの科学者が政府の軍事部門の研究者となり運動から離れていった。こうして、一部の平和主義者たちの活動を除き、アメリカの平和運動は事実上の休止に追い込まれた⁸。

いまひとつ、シカゴで展開された平和運動の重要な側面として、萌芽期の公民権運動における平和運動の役割を指摘しておきたい。1942年にシカゴで結成された「人種平等会議 (Congress of Racial Equality, COREと略)」は、1950年代から60年代にかけて高揚した公民権運動における先駆的な団体として知られているが、COREの設立・発展に際し、キリスト教系平和団体「和解のための連帯・米国支部 (American Fellowship of Reconciliation, FORと略)」が中心的な役割を果たした。FORは1915年、クエーカー教徒、社会福音運動に携わる牧師、YMCAの指導者などにより結成された、非暴力・反戦を思想基盤とする団体である。FORは、第一次大戦後ヨーロッパで人道復興支援に努め、第二次世界大戦中は良心的兵役拒否者の援助組織として活動した。1940年にA. J. マスティ牧師が執行委員長になると、ガンジーの非暴力主義に依拠した市民的不服従を社会正義達成のため取り入れることに深い関心を寄せるようになった。FORは早くから人種問題に関心を寄せていたが、シカゴ支部のメンバーがシカゴの公共施設における人種差別措置に対して非暴力直接行動を行うようになった。こうしてCOREの結成にいたるが、彼らはFORの人的および財政的援助のもと、その活動範囲を全米に広げていった⁹。

ところで、1950年代中葉になると、国際情勢や国内環境が好転し、アメリカの平和運動は再び活発になった。朝鮮戦争とマッカーシズムの終結、スターリンの死など東西冷戦の緊張緩和に加え、1954年ビキニ環礁での水爆実験が平和運動を活性化させる主な要因となった。アメリカでは1950年代初頭より一部の科学者のあいだで放射性落下物の危険性が指摘されていたが、ビキニ事件によってさらに多くの科学者が声をあげるようになった。米国科学者連盟が中心となり、『原子科学者会報』や講演会などを通して核爆発に関する知識を広め、この問題に関する国民レベルの議論を喚起しようとした。また、FORなど既存の平和団体も、署名活動や新聞への意見広告など核実験禁止の宣伝運動を活発に行った。¹⁰

2. 広島原爆投下10周年記念集会

(1) 主催者と記念集会の目的

このように、シカゴにおける広島原爆投下10周年記念集会は、核実験に対する憂慮が平和運動内で高まりつつあった時期に行われた。集会を企画したのは、FORシカゴ支部と「米国フレンド奉仕委員会（American Friends Service Committee, AFSCと略）」シカゴ支部である。AFSCは、第一次大戦後のフランス復興を目的とし、1917年にクェーカー教徒が大戦中の良心的兵役拒否者を組織化したのが始まりである。FORと同様に、第二次世界大戦中は再び良心的兵役拒否者の精神的・物理的援助組織として活動し、戦後はヨーロッパで復興活動に当たった。AFSCもまた、非暴力・反戦という絶対平和主義を堅持していた。¹¹

集会開催の告知は、AFSCシカゴ支部が行った。それによると、集会は8月6日午後1時半よりシカゴ大学のスタグ・フィールドで開催されることになっていた。ここは、原爆製造を可能にしたウラニウムの連鎖反応実験に初めて成功した場所である。記念集会を行う前に、参加者はポスターを掲げて市街を行進し、一般のひとびとに集会への参加を促す予定になっていた。シカゴの日系新聞『シカゴ新報』は、AFSCのメンバーの言葉を引用し、

記念集会の目的を伝えている。

われわれが此の日を記念するのは恐ろしい広島悲劇に対するわれわれの責任を想起し、再びヒロシマが生じないようにとわれわれの決心を新にするためであります。国際的対立の平和的解決手段を探し出すのはわれわれアメリカ人並に世界各国人民の責任です。即ちわれわれの資源と富——原子精力〔原文ママ〕を含めて——を建設的目的に使用し、世界同胞と友愛の観念を現実化することです。われわれは他のアメリカ人もこの「ヒロシマ・デー」に参加し、日常活動を通じて平和のために献身するに至ることを希望しています。¹²

この説明の中にはいくつかの関連するメッセージが含まれている。ひとつめは原爆投下の解釈である。ここで呈示された原爆投下の解釈は、当時すでにアメリカ社会で支配的であった原爆の「公式の物語」に異を唱えていた。集会の主催者は原爆投下を恐ろしい悲劇と捉え、それを行った米国の責任を問うていた。さらに、このような悲劇が二度と起こらないよう決意し、国際紛争を軍事力ではなく平和的に解決する必要性を世界共通の課題として訴えた。また、核兵器に反対する一方で、核エネルギーの平和的利用については積極的に支持した。

記念集会開催の目的は、開催の発表と同時にAFSCが提示した、「悔い改めへの訴え」という声明の内容を検討することでより明らかになる。12名の宗教指導者、教育者によって署名されたこの声明は、FORが中心となり作成したもので、8月3日の『ニューヨーク・タイムズ』読者欄に掲載された。声明は、冒頭で原爆投下について「その意味をわれわれが反省し、聖霊の声に耳を傾けるのは重要である。われわれに来る使命は告白と懺悔へのそれであると信じる」と述べ、広島原爆投下の日を悔悛の日とし、悔い改めを促した。また、声明は戦略面からも原爆投下を批判し、戦争末期すでに疲弊していた日本を降伏させるために原爆は必要ではなかった、と述べた。さらに、どのような国も水爆を落とす「道徳的権利」はないと断言し、原爆投下によって核の時代を到来させたアメリカこそが核の恐怖を取り除く先陣とならなければならない、と訴えた。最後に、新しい種類の力

の行使、すなわちキリスト教的な隣人愛によって国際紛争で疲弊した国々を癒すことを主張している。¹³ シカゴ集会の主催者は、この声明を紹介することにより、「ヒロシマ・デー」を悔悛の日と位置づけ、シカゴの住民たちに原爆投下について内省する機会を提供し、水爆の非人道性を糾弾し、キリスト教の教えにもとづく人道復興支援を訴えたかったのであろう。

実は、このような記念集会はこれが初めてではなかった。マスティ牧師の強いリーダーシップのもと、FORは遅くとも1950年よりヒロシマ・デーを悔悛の日と定義し、記念集会を行っていた。第二次世界大戦中、タイム誌が「アメリカのナンバー・ワン平和主義者」と呼んだマスティは、広島・長崎への原爆投下に深い衝撃を受け、戦後は一貫して人道的な観点から核兵器反対を唱え続けた。信仰にもとづくマスティの原爆観は、やがて8月6日を悔悛と核兵器反対の原点と捉える考えへと発展した。そして原爆投下5周年に当たる1950年8月6日に臨み、マスティは全米2000人の会員に向けて、反核集会や核兵器関連施設前での抗議ピケなどを実施するよう呼びかけた。また1955年には、前述の『ニューヨーク・タイムズ』への声明文の投稿に加え、ニューヨークの記念集会開催においても指導的な役割を果たした。このような背景を鑑みると、シカゴ集会には、FOR——特にマスティ——の考えが少なからず影響を与えていたことは想像に難くない。¹⁴

記念集会は、ほかにいくつかのプログラムを企画していたが、そのどれもが被爆者に関するものだった。第一番目は募金活動である。AFSCは広島の被爆者を支援するため、ふたつの慈善事業に係わっていた。ひとつは、日米による病院ならびにコミュニティーセンター建設計画であり、いまひとつは、原爆の後遺症を治療するため渡米したいいわゆる「原爆乙女」たちの援助である。このように、集会の主催者はひとびとに慈善活動への参加も呼びかけた。¹⁵

主催者はまた、集会に先立ち報道関係者を対象に日本映画『原爆の子』を上映した。『原爆の子』は広島大学の教育学者長田新が収集した原爆孤児の作文集を下敷きとし、1952年の広島原爆投下の日に公開された。当時の大スターであった乙羽信子が主演し、日本では興行的に大成功を収めた。物語は、原爆投下から7年経った広島を被爆者である当時の幼稚園の教師が

訪れるところから始まる。原爆によって多くの教え子たちの運命は大きく変わり、あるものは路上で靴磨きをして生計を立て、あるものは死の床で世界の平和を願っていた。絶望と貧困にも拘らず力強く生きる子供たちの姿を映し出した映画であった。日本支部を通じこの映画を入手したFORは、反米的なトーンや共産主義的なメッセージを排除したこの映画の「脱政治的」な平和主義を高く評価し、これをアメリカ各地で広く上映することにより、原爆に対する道義的な反対と被爆者に対する共感が一般のアメリカ人に芽生えることを期待していた。その意味で、『原爆の子』は、原爆投下の悔い改めと被爆者支援という記念集会のテーマには打ってつけの映画であったといえる。¹⁶

(2) 記念集会のスピーカー

記念集会は、予定どおりシカゴ大学スタグ・フィールド内にある、ウラニウムの連鎖反応実験成功を記した記念碑の前で行われた。集會に集まった約100人の聴衆の前で、3人の人物がスピーチを行った。高名な原子科学者で科学者運動の推進者でもあった、シカゴ大学教授のハロルド・ユーレイ、同じくシカゴ大学の政治学者レクスフォード・タグウェル、科学技術の平和利用を推進する科学者団体「科学の社会的責任のための協会（Society for Social Responsibility in Science, SSRSと略）」のメンバー、トルーマン・カークパトリックである。3人はそれぞれの政治信条や思想的基盤にもとづきスピーチを行った。

ユーレイは1934年のノーベル化学賞受賞者で、マンハッタン計画にも参加したが、大戦後は科学者の平和運動において中心的な役割を果たした。核時代における科学者の社会的責任を強く意識していたユーレイは、『原子科学者会報』などへの雑誌投稿や講演を通じ、核エネルギーに関する教育活動を行うとともに、議会への働きかけや関連する委員会での証言など、積極的に外交政策の提言を行った。また、強力な世界政府推進者であったユーレイは、多くの世界政府支持者と同様の認識を持っていた。すなわち、国際紛争解決において戦争という手段を放棄しない限り、核兵器の問題は

解決せず、結果的に人類の破滅を導く、というものである。そして、究極的に戦争を廃止するためには世界政府の樹立が唯一の方法であるが、その第一歩として核エネルギーの国際管理実現を目指していた。いっぽう、日本への原爆投下に関してはAFSCやFORの立場とはかけ離れていた。ユーレイは、科学者は核エネルギーを「発見」し科学者として本分を全うしたのであって、核兵器を製造したことに對し罪の意識を持つべきではないと考えていた。¹⁷

記念集会におけるユーレイのスピーチは、以上のような彼の信条を反映していた。ユーレイはまず、こんにち製造されている核兵器は「地球上の全ての生命」を脅かしている、と警告した。そして、核戦争を回避するには戦争という手段に抛らずに国際紛争を調停する必要がある、戦争の非法化こそが世界規模で取り組まねばならない最重要課題であると続けた。それを実現する唯一の有効な手だては世界政府の樹立であり、統治される者の合意によって成り立つ「効果的な」世界政府の権限による「執行可能な」法の力をより広範に押し広げることが恒久平和達成への唯一の道筋であると主張した。前述したように、この記念集会が行われた1955年においては、世界政府運動はすでに瓦解していた。にもかかわらず、世界政府樹立を希求するユーレイの信念は衰えることがなかった。¹⁸

2人目のスピーカー、タグウェルは連邦政府による計画経済の推進者で、1930年代初めにルーズヴェルト政権に政策顧問として参加したのちアカデミックの世界に戻り、教鞭を執る傍らニューディール政策などに関する書物を著していた。タグウェルもまた世界政府支持者であり、シカゴ大学学長ハッチンスが組織した世界憲法作成委員会のメンバーであった。しかし、タグウェルのスピーチの主眼は世界政府支持ではなく、科学技術が破壊目的に利用されることに対する強い憂慮であった。「危機の物語」と名づけられたスピーチの中でタグウェルは、科学の進歩は人類の発展をもたらすのではなく、むしろ後退を促すのではないか、という問いを投げかけた。そして、その原点が広島原爆投下であった。タグウェルはまず記念集会が行われた場所に言及し、原爆製造を初めて可能にしたこの場所ほど「知性の勝利」と「良心の敗北」が直結している場所はない、と語った。そして、

広島への原爆投下は戦略的に必要なかったと述べ政府の決定を批判した。さらに、軍部に核兵器管理が委任されている状態を批判し、今後10年間に
おいては核エネルギーの平和利用を推進するよう主張した。このように、
タグウェルは広島原爆投下を、科学が破壊行為に加担し人類の悲劇を招いた
原点と捉え、そのような将来に深い憂慮を表明したのだった。彼は、「人類
が常に科学的功業の代償を払わなくてはならない」のであるなら「人類
の未来はない」と括った¹⁹

3人目の講演者カークパトリックは、前述の二人と較べると全国的な知名度はほとんどなかった。カークパトリックはSSRSの主要メンバーで、団体が発行する会報の編集責任者であった。ここで、SSRSという組織について概略を述べておきたい。SSRSは1949年秋、科学技術の破壊目的への利用を憂慮する科学者たちによって結成された。この団体は、科学技術は破壊のために決して手を貸すべきでないという、科学における絶対平和主義を唱えていた。そして、科学者や技術者個人の道徳的責任を重視し、個々人の判断で破壊的な仕事と平和的・建設的な仕事の線引きを行い、後者のみを遂行することを呼びかけ、そのようなひとつの国際的なネットワークの構築を目指していた。会員数は300名余りで、平和主義者や良心的兵役拒否者が多数含まれていた²⁰

ここで強調しておきたい点は、SSRS結成に際しマスティが主導的役割を果たしたことである。戦後、マスティは絶対平和主義を実践することの困難さを承知しつつも、社会のさまざまなグループに対しそのような思想の育成を促し、科学者に対しても、核兵器開発に関連する研究には従事しないよう訴えた。ほとんどの科学者は、核兵器の国際管理が成立しない限り、国家の安全保障上国家への非協力は不可能であると反論したが、ごく少数の科学者がマスティの提案を受け入れた。その一人がコロンビア大学で機械工学を教えていたビクター・パスキスであった。クエーカー教徒でFORの会員でもあったパスキスはマスティの考えに賛同し、この2人が中心となりSSRS発足に至った。このような経緯をみると、SSRS設立にはマスティの平和思想が深くかかわっていたといえる²¹

同様にして、SSRSの設立経緯や思想基盤を考慮すると、記念集会におけ

るカークパトリックのスピーチが主催者の趣旨に最も近かったことは容易に想像できるであろう。カークパトリックはアメリカが原爆を最初に製造し使用したことを重視し、核による終末という恐怖を生み出した大半の責任は、アメリカの政治指導者と彼らを選んだアメリカ人にあると主張した。また、カークパトリックは広島で犠牲になったひとびとに言及し、彼らの犠牲を無駄にしないためにも、核の脅威を取り除き恒久的な平和を確立する努力をしなければならないと述べた。彼が特に強調したのは平和世論の育成である。世界政府の樹立など恒久平和の状態を創出するには、まず一般市民の間に平和創出への意志を醸成させることが肝要である。カークパトリックはSSRSの基本理念を紹介しながら個人個人の道徳的責任を強調し、破壊的行為に加担しない強い意志がひとりひとりに求められている、と訴えた。このように、カークパトリックはアメリカ市民に向けて原爆投下の内省を促すとともに、個人の「思考の変化」を平和創出の基盤として重視し、武力放棄を訴えた。これらは、集会主催者であるFORやAFSCが掲げて立つ絶対平和主義と通底するものであった。²²

3人のスピーチには共通点もみられたが、むしろ相容れないメッセージが際立った。特に、ユーレイと、タグウェル、カークパトリックの間に大きな差が見られた。たとえば、広島原爆投下の是非に関しては、ユーレイはほとんど触れなかったが、タグウェルは戦略的見地から原爆投下を批判し、「良心の敗北」という言葉で原爆投下の非人道性を非難した。カークパトリックもまた、核兵器の凄まじい破壊力を詳述し、最初に核兵器を使用したアメリカが背負う責任の重さを強調した。また、核兵器に対する見解においても3人のあいだに一致は見られなかった。カークパトリックは直接的に、タグウェルは間接的に核兵器反対を唱えたが、ユーレイは核兵器反対を表明しなかった。さらに、将来の展望について、タグウェルは核エネルギーの平和利用の推進を示唆し、カークパトリックは「平和世論」の育成を平和創出の第一歩とした。いっぽうのユーレイは、まったく別の角度から、強力な世界政府による戦争の非合法化こそが核の脅威を取り除く最善の方法であると主張した。3人のスピーチにおける最も重大な思想上の亀裂は、ユーレイの絶対平和主義批判であった。ユーレイは、「心地よい言葉、宗教

的な戦争の否定、個々人の善意——そのどれもこの問題（永続的な平和の達成）を解決してこなかった」（括弧内筆者）と喝破し、キリスト教にもとづく反戦・非暴力や個人の倫理観・道義心は、恒久平和達成には無益であると断言した²³。しかし、これこそがカークパトリックのスピーチの主題であり、記念集会の主催者である AFSC や FOR の根本理念であった。

（3）記念集会の報道—— 特権的に報道されたもの、捨象されたもの

記念集会に対する地元メディアの反応はさまざまだったが、参加者100人という規模を考えれば、メディアの関心は例外的に高かったと言ってよい。週末のラジオ番組『NBCモニター』は集会を報道するため記念集会にスタッフを派遣したが、録音されたスピーチは結局ラジオで流れなかった。新聞報道では、シカゴの4大日刊紙のうち、共和党系で保守的新闻として名高い『シカゴ・トリビューン』は記念集会についていっさい報道しなかった。いっぽう、リベラルな思想で知られていた『シカゴ・サン＝タイムズ』と『シカゴ・デイリー・ニュース』は集会について写真入りで報道した。そのほか、日系新聞『シカゴ新報』が記念集会に先立ち、集会の目的や計画内容について詳しく報じた²⁴。

興味深いことに、『サン＝タイムズ』と『デイリー・ニュース』の記事は報道内容の偏り方が奇妙に一致していた。『デイリー・ニュース』の見出しは「ユーレイ、タグウェル、原爆製造の場で平和を訴える」というもので、2人の顔写真を載せ、スピーチの内容もほぼ半分ずつ掲載し、2人のシカゴ大学教授を平等に扱った。聴衆を前にスピーチするユーレイの写真を載せた『サン＝タイムズ』はユーレイの存在感をひととき大きく伝えた。「核戦争は世界を危険にさらすであろう、ユーレイ、広島集会で語る」という見出しのとおり、記事はユーレイのスピーチの要約に割かれ、タグウェルのスピーチは一部分のみ引用された。また、両新聞とも集会の行われたスタグ・フィールドと原爆の関連について説明を怠らなかった²⁵。

この2つの日刊新聞で共通して捨象されたのは、記念集会本来の目的と広

島の被爆者であった。『サン＝タイムズ』と『デイリー・ニュース』はともに、8月6日を悔悛の日と定め原爆投下を悔い改めるという集会の趣旨を報道しなかったのみならず、集会に先立って上映された『原爆の子』や被爆者を援助する募金活動についても一切触れなかった。主催者のAFSCとFORについては団体名のみを掲載し、さらに3人のスピーカーのうち、カークパトリックについてはスピーチの内容はもとより名前すらも紹介しなかった。このように二つの記事でともに捨象されたのは、宗教的絶対平和主義と被爆者に象徴される実体としてのヒロシマだった。結果的に、これらの日刊新聞は記念集会の記事を掲載はしたものの、主催者の意図は伝えず、この記念集会を、原爆投下を反核・平和表明の象徴として呈示する集会として「語り直した」といえる。²⁶

記念集会を別の角度から詳しく報道したのは『シカゴ新報』であった。1945年秋に創刊されたこの日系新聞は、1950年代には約1万人規模であったシカゴの日系人社会にとって重要な情報源となっていた。週2回刊で、裏表紙以外はすべて和文ページで構成されており、記事はニュース報道と解説が混在していた。²⁷ 記念集会が開かれる数日前から、『シカゴ新報』は集会の計画について詳細に伝えた。たとえば、集会開催の目的についてAFSCメンバーの言葉を直接引用したり、『ニューヨーク・タイムズ』に掲載された声明文『悔い改めの訴え』の冒頭部分を紹介するなど、集会開催の趣旨を詳しく掲載した。また、映画『原爆の子』については、制作の経緯、ストーリーなどを詳しく説明し、「これを見ながら何度も涙が出てしょうがなかった」と絶賛した。²⁸ 他方、英文で書かれた裏表紙では、記念集会の取り扱い方は日本語ページとは対照的に大まかな内容を紹介するにとどまった。興味深いことに、『シカゴ新報』は実際の集会の内容については報道しなかったため、これを読む限りでは集会でスピーチを行った人物やスピーチの内容に関して知ることはできない。

このように、シカゴの主要な日刊新聞と、エスニック新聞である日系新聞とでは記念集会の報道内容に大きな違いがあった。しかし、講読者数の圧倒的格差を鑑みればどちらの報道がより多くのアメリカ人に伝わったかは一目瞭然であろう。こうして、8月6日を悔悛の日として記念し、被爆者

に救済の手を差し伸べる、という集会本来の目的は大多数の地元市民には伝わらず、反核兵器と世界政府推進の象徴として原爆投下が記念されるといふ記念集会の「新しい物語」が社会に向けて語られることになった。

おわりに

戦後アメリカにおける反核運動の一大拠点であったシカゴで行われた広島原爆投下10周年の記念集会は、この悲惨な歴史に関するさまざまな言説や表象がせめぎあっていたが、メディアによる報道過程のなかで内容の選別・捨象が行われ、集会本来の姿とは異なるかたちで伝えられた。記念集会の主催者であるAFSCとFORは、8月6日を悔悛の日と位置づけ、永続的な平和の創出に向けて個々人が日々努力を行うことを呼びかけ、被爆者を支援する募金活動などを行った。また、集会でスピーチを行った3人はいずれも研究者であったが、その思想基盤や政治信条は大きく異なり、スピーチの内容も相容れぬ要素を含んでいた。平和主義を掲げる科学者団体の会員であるカークパトリックは、原爆を投下したアメリカの責任を問い、個人の「心の変化」を平和創出の基底とした。また、シカゴ大学の政治学者タグウェルは、科学技術の発展が人類の悲劇に手を貸すことに深い憂慮を示した。他方、高名な科学者ユーレイは、人間の内的な徳や宗教的な平和志向は恒久平和の創出には無益であると批判し、世界政府樹立のみが唯一の方法だと主張したが、これは主催者であるAFSCやFORの根本理念を否定したにも等しかった。この記念集会について、地元の主要紙はユーレイやタグウェルのスピーチを大きく報道するいっぽう、原爆投下の悔悛と贖罪、個々人の道義心の重視といった宗教平和主義の思想や被爆者支援プロジェクトなどは捨象した。このような報道内容の偏向は、記念集会を核の脅威と現実味を失った世界政府希求によって象徴されるヒロシマ・デーとして「語り直す」ことになった。こうして、原爆投下の「公式の物語」に対抗するかたちで始まった記念集会は、一般社会に受容される過程で主要部分を骨抜きにされ、「公式の物語」に抗わない形で原爆の公的記憶に回収されたのである。

ここで重要なのは、平和運動とメディアの関係のみならず、平和運動内部の力関係や、集會を報じる各新聞の社会における影響力の格差、といったさまざまな権力関係のあり方が、原爆投下の記憶形成を決定づけた点である。多くの講読者を持つ日刊新聞が公的記憶の形成において圧倒的な優位に立っていたことは疑いの余地がないであろう。また、それらの日刊新聞が実際の記念集會から選び取る素材は、高名な学者のスピーチであり、ここに社会への受容度という点において、平和運動内に格差が生じていることが窺われる。最後に、シカゴの事例は、1950年代後半から大衆規模へ拡大してゆくアメリカの反核運動内部で形成された原爆投下の集会的記憶とその外部社会への受容を考察する際に、ひとつの指標となるであろう。1960年代初めに頂点に達した反核実験運動は、既存の平和団体に加え、女性、学生など新しい社会層の参入を促した。運動が展開するとともにさまざまなグループや団体がさまざまな形で広島原爆投下の日に記念活動を行い、メディアによって伝えられた。この過程で形づくられるヒロシマの公的記憶に関しては今後の課題としたい。

註

1. 原爆投下の「公式の物語」形成を決定づけたのは、投下直後に発表されたトルーマンの声明と、1947年『ハーバース・マガジン』に掲載された元陸軍長官ヘンリー・スティムソンの原爆擁護論文であるとされている。ロバート・リフトン、グレッグ・ミッチェル（大塚隆訳）『アメリカの中のヒロシマ（上）』（岩波書店、1995年）、2-4、129-161; Laura Hein and Mark Selden, eds., *Living with the Bomb: American and Japanese Cultural Conflicts in the Nuclear Age* (New York: M.E. Sharpe, 1997), 4-5; 油井大三郎『日米戦争観の相剋——摩擦の深層心理』（岩波書店、1995年）、82-107、などを参照。
2. 原爆展論争に関しては、エドワード・リネンソール、トム・エンゲルハート編（島田三蔵訳）『戦争と正義——エノラ・ゲイ展論争から』（朝日新聞、1998年）；マーティン・ハーウィット（山岡清二監訳）『拒絶された原爆展——歴史のなかの「エノラ・ゲイ」』（みすず書房、1997年）などを参照。また、この論争は文化多元的状况に置かれたアメリカの「文化戦争」という局面を持っていたことも忘れてはならない。米山リサ『暴力・戦争・リドレス——多文化主義のポリテイクス』（岩波書店、2003年）、86-104。
3. アリス・キンボール・スミス（広重徹訳）『危険と希望——アメリカの科学者運動：1945-1947』（みすず書房、1968年）；Wesley T. Wooley, *Alternatives to Anarchy: American Supranationalism Since World War II* (Bloomington: Indiana University Press, 1988); Charles Chatfield, *The American*

Peace Movement: Ideals and Activism (New York: Twayne Publishers, 1992); Lawrence Wittner, *The Struggle against the Bomb*, vol. 1, *One World or None: A History of the World Nuclear Disarmament Movement through 1953* (Stanford: Stanford University Press, 1993); Paul Boyer, "Exotic Resonances: Hiroshima in American Memory," in Michael Hogan, ed., *Hiroshima in History and Memory* (Cambridge, UK: Cambridge University Press, 1996), 143-167.

⁴ 中條氏は、「公的記憶」に関する研究が一律に、様々な関心や利害の交渉過程のすえ公的記憶が生産されることを主張するいっぽう、そうした記憶の形成を決定する「権力関係のあり方やそれに基づく対立自体」については殆ど注目していない、と述べている。中條氏「[公的記憶]、[伝統]、[歴史] — 現代アメリカ合衆国社会と「ナショナル・イメージ」」『アメリカ史研究』第21号 (1998年8月)、61。

⁵ 菅見の限りでは、戦後10年間において長崎の原爆投下を記念した集会などはほとんど見つかることができなかった。

⁶ スミス、19-57, 188-196; Chatfield, 92-93.

⁷ Paul Boyer, *By the Bomb's Early Light: American Thought and Culture at the Dawn of the Atomic Age* (New York: Pantheon Books, 1985), 33-38; Jon Yoder, "The United World Federalists: Liberals for Law and Order," in Charles Chatfield ed., *Peace Movements in America* (New York: Schocken Books, 1974), 95-115; Wooley, 41-44; Joseph Preston Baratta, "Bygone 'One World': The Origin and Opportunity of the World Government Movement, 1937-1947" (Ph.D. diss., Boston University, 1982), 137-140.

⁸ Charles DeBenedetti, *The Peace Reform in American History* (Bloomington: Indiana University Press, 1980), 147-48, 150-51; Wooley, 79-81.

⁹ August Meier and Elliott Rudwick, *CORE: A Study in the Civil Rights Movement 1942-1968* (New York: Oxford University Press, 1973), 3-6; James Tracy, *Direct Action: Radical Pacifism from the Union Eight to the Chicago Seven* (Chicago: University of Chicago Press, 1996), 20-22, 29, 31; Charles Howlett, "Fellowship of Reconciliation," in John Whiteclay Chambers II, ed., *The Oxford Companion to American Military History* (New York: Oxford University Press, 2001), 261; DeBenedetti, 95.

¹⁰ Robert Divine, *Blowing on the Wind: The Nuclear Test Ban Debate 1954-1960* (New York: Oxford University Press, 1978), 47-56; Lawrence Wittner, *The Struggle against the Bomb*, vol. 2, *Resisting the Bomb: A History of the World Nuclear Disarmament Movement, 1954-1970* (Stanford: Stanford University Press, 1997), 10-13.

¹¹ Chatfield, 46, 77. 結成から第二次大戦勃発までのAFSCの活動については、Mary Hoxie Jones, *Swords into Ploughshares: An Account of the American Friends Service Committee, 1917-1937* (New York: The Macmillan Company, 1937) を参照。

¹² 『シカゴ新報』1955年8月3日。

¹³ "Use of A-Bomb Condemned: Group Notes Tenth Anniversary of Bombing of Hiroshima," *New York Times*, 3 August 1955, 22.

¹⁴ FORのヒロシマ・デー記念活動については、拙稿 "Commemoration of Hiroshima Day in the Antinuclear Weapons Movement in the United States, 1950-1955: The Case of the Fellowship of

Reconciliation," *The Tsuda Review* 46 (November 2001): 1-26 を参照されたい。

15. 前掲「シカゴ新報」。原爆乙女については、Rodney Barker, *The Hiroshima Maidens: A Story of Courage, Compassion, and Survival* (New York: Penguin Books, 1986) を参照。

16. 長田新編『原爆の子(上)(下)』(岩波書店、1990年)；“Memorial Meeting Of A-Bombing Slated,” *Chicago Shimpō*, 6 August 1955; 平野共余子「天皇と接吻——アメリカ占領下の日本映画検閲」(草思社、1998年)、100-1; 平野共余子「占領期の日本映画が描いた原爆」、ミック・プロデリック編(柴崎昭則、和泉雅子訳)『ヒバクシャ・シネマ——日本映画における広島・長崎と核イメージ』(現代書館、1999年)、106; Asai, “Commemoration of Hiroshima,” 18.

17. Boyer, *By the Bomb's Early Light*, 35, 50, 105, 145, 336; Harold Urey, “An Alternative Course for the Control of Atomic Energy,” in *Bulletins of Atomic Scientist*, vol. 3, no. 6 (June 1947), 140-42; 中沢志保「アメリカの初期核政策と科学者の立場」『国際政治』第83号、(1986年10月)、126-142; Wooley, 7-8.

18. “Urey, Tugwell Make Pleas For Peace at Atomic Site,” *Chicago Daily News*, 6 August 1955, 4; “A-War Would Imperil World, Urey Says In Hiroshima Rite,” *Chicago Sun-Times*, 7 August 1955, 12; SSRS Newsletter, Society for Social Responsibility in Science, September 1955, 4, Box 51, Folder 6, The Papers of the Federation of American Scientists (FAS), Special Collections Research Center, University of Chicago Library, Chicago; “FOR-AFSC Cosponsor Hiroshima Service,” *Fellowship*, November 1955, 24.

19. Gerald N. Grob and George Athan Billias eds., *Interpretations of American History: Patterns and Perspectives*, vol. 2, *Since 1877*, 6th ed. (New York: Free Press, 1992), 279-80; Baratta, 140; 前掲 *Chicago Daily News*; *Chicago Sun-Times*; SSRS Newsletter, 4; *Fellowship*.

20. バンフレット、SSRS, n.d., Box 51, Folder 7, The Papers of the FAS, Special Collections Research Center, University of Chicago Library, Chicago; “Science Association Bars Pacifist Group,” *New York Times*, 14 December 1954, 41.

21. Jo Ann Ooiman Robinson, *Abraham Went Out: A Biography of A.J. Muste* (Philadelphia: Temple University Press, 1981), 142-43.

22. 前掲 SSRS Newsletter, 2.

23. 前掲 *Chicago Sun-Times*.

24. 藤井寮一「シカゴ日系人史」(シカゴ日系人会、1968年)、97-98; 前掲 SSRS Newsletter, 1, 4.

25. 前掲 *Chicago Sun-Times*; *Chicago Daily News*.

26. 前掲 *Chicago Sun-Times*; *Chicago Daily News*. また「デイリー・ニュース」は、前日の新聞紙上で、AFSC と FOR が公開した「悔い改めの訴え」にシカゴ在住の11名が署名したと伝えたが、翌日の記念集会との関連については明示していない。“Sign Hiroshima ‘Call To Repentance’,” *Chicago Daily News*, 6 August 1955, 14.

27. 前掲「シカゴ日系人史」、134、305-9; 横山勝英「シカゴの日系人社会と意識構造」戸上宗賢編著「交錯する国家・民族・宗教——移民の社会適応」(龍谷大学社会科学研究所叢書第45巻、2001年)、111.

²⁸ 前掲『シカゴ新報』1955年8月6日。